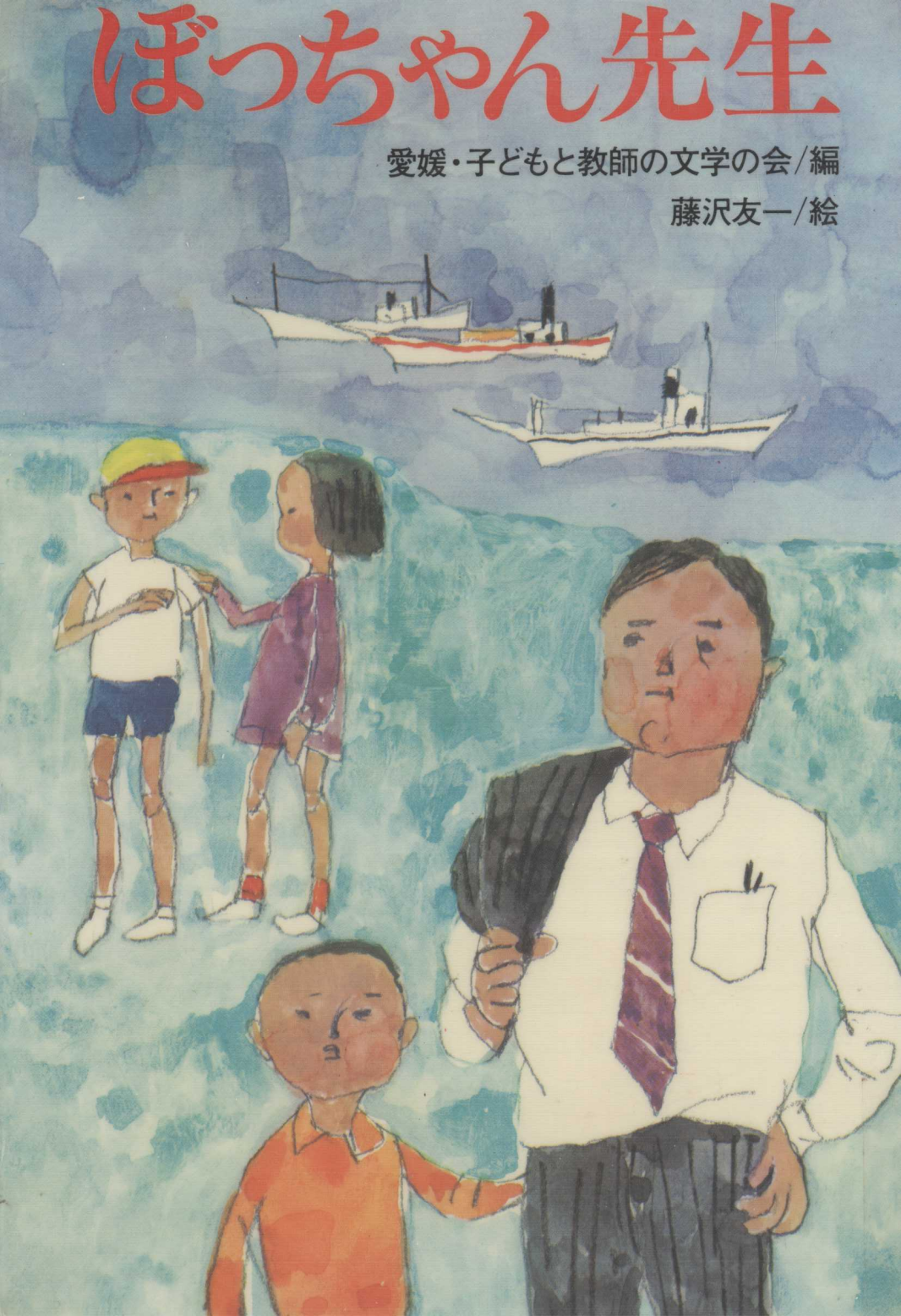
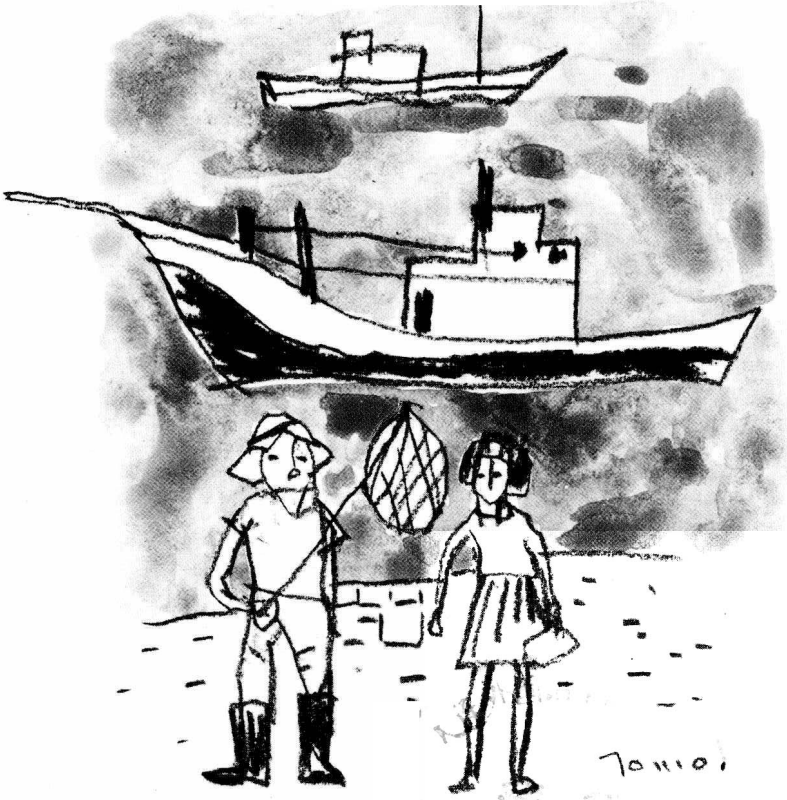
ぼっちゃん先生

愛媛・子どもと教師の文学の会/編
藤沢友一/絵



やん先生

愛媛・子どもと教師の文学の会/編
藤沢友一/絵



愛媛・子どもと教師の文学の会／編
ぼっちゃん先生
ポプラ社　昭和52（1977）
150p　22cm（先生のとっておきの話　16）
〔分類〕918

ぼっちゃん先生　検印省略

先生のとっておきの話 16〈愛媛編〉
愛媛・子どもと教師の文学の会／編
松山市桑原町98　松本扶士子　気付
昭和52年12月　発行©
発行者　久保田忠夫
発行所　ポプラ社　〒160　東京都新宿区須賀町5
振替　東京4-149271
印刷所　株式会社須藤印刷所　製本所　島田製本株式会社

落丁・乱丁本はいつでもおとりかえいたします
8095—056016—7764

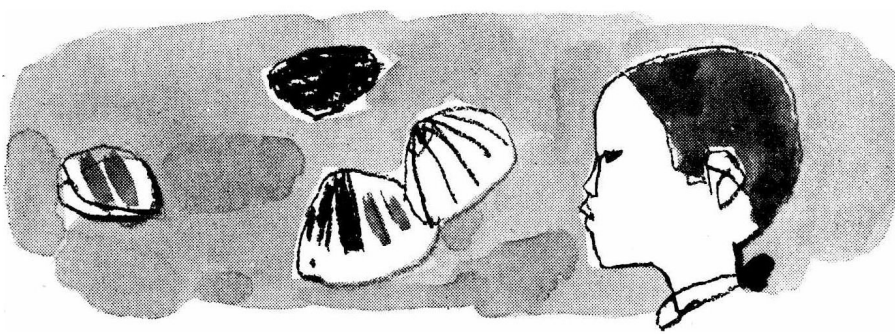
はじめに

いちど読むと、いつまでもわすれられない話があります。この本の話も、そういうものです。先生がたが、心のおくにしまっていた、たいせつな思い出が語られているからです。

読みながらみなさんは、先生も、子どものころには、こんなことをしたのかなあと、思うところもあるでしょう。また、先生たちだって、ぼくたちとおなじように、心の中では、いつもないたり、おこったり、笑ったりしているんだなと、いうこともわかるでしょう。

それで、みなさんは、先生をいっそうすきになるのです。

久保（くぼ）　喬（たかし）

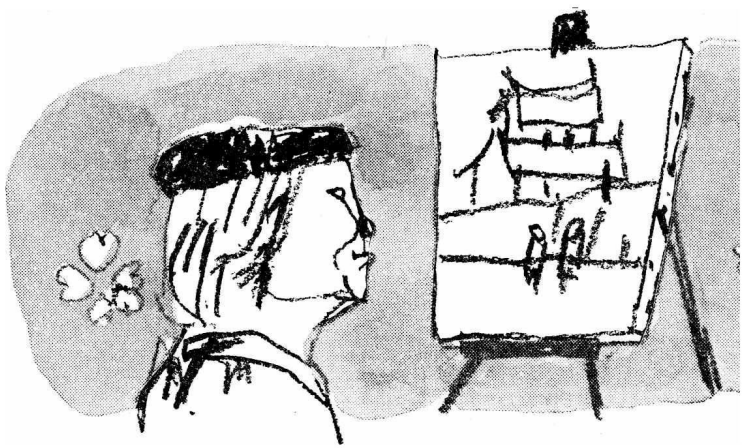


もくじ

はじめに　1
エサまきにいちゃん　6
ギオンボーぼくの初恋(はつこい)ー　27
みゆきちゃんの分まで　46
ぼっちゃん先生　65

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

白いゴンドラのくつ　80
雪山の一日　96
八月の入道雲に　113
風になびいたサクラ色の貝　128
あとがき　148



編集委員

児童文学者
大西伝一郎

児童文学者
久保　喬

児童文学者
代田　昇

子どもの本研究家
宮野　英也

子どもの本研究家
若月　真作

画家紹介

藤沢友一（ふじさわともいち）　北海道小樽市に生まれる。作品には，『はしれクラウス』（金の星社），『さよならよざえむさん』（岩崎書店）などの絵本のほか，『戦艦武蔵のさいご』（童心社），『あかりのない夜』（童心社），『雪の街の落日』（ポプラ社）のさし絵がある。

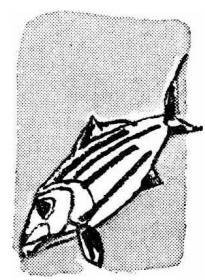
現住所　東京都目黒区中目黒
1—1—65—307

ぼっちゃん先生

愛媛・子どもと教師の文学の会/編
藤沢友一/絵

エサまきにいちゃん

井上　基行



一　初船出

「かあちゃん、ミヨちゃん、いってくるよ。」

中学三年生の健ちゃんは、おとなのようなくちょうでいいました。

「気をつけてね。」

かあちゃんが、朝と昼の二回分のべんとうづつみをわたしながらいいました。

「にいちゃん。大きなかつおをつってきてよ。」

小学校三年生の妹のミヨちゃんが、両手をいっぱいに広げていいました。

「うん、うん。」

健ちゃんは、こまったように、あいまいにわらいました。

「かあちゃん、船まで行こうよ。」
ミヨちゃんが、かあちゃんの手をひっぱります。
「うん。こんばんははじめての船出だものね。」
「見おくりなんか、せんでもええのに。」
口ではそういいながらも、ほんとうはうれしそうでした。
健ちゃんがのる南海丸は、家から百メートルほどはなれた海岸につないであります。
そとはやみ夜でしたが、海岸までの道は、あけはなった家いえからもれる電燈のあかりで、くらくはありません。
もう十一時ごろだというのに、夕すずみのおじさんやおばさんたちが、家のまえに持ちだしたえん台にこしかけて、夏の夜をたのしんでいました。
「あ、健ちゃんだね。沖にいくんだね。かあちゃんは大助かりだよ。戦争がすんで三年にもなるというのに、物のねだんは、高くなるいっぽうだからねえ。がんばってね。」
さんぱつ屋のおばさんが、自分の足もとのカを、うちわでばたばたおいながら声をかけてくれました。

健ちゃんは、高校へあがりたかったけど、かつおぶし製造所ではたらいているかあちゃんに、あまり苦労をかけてはと思って、まよったすえに、かつお船の漁師になろうと決心したことを、おばさんは知っているようでした。

「おばちゃん。にいちゃんはね、大きなかつお、つってくるよ。ねえ、にいちゃん。」

ミヨちゃんが、口をはさみました。

「う、うん。」

健ちゃんは、てれくさそうにうなずきながらとおりすぎました。

「健ちゃん。戦死したとうちゃんのかわりだ。三日ぼうずになるなよ。」

船だいくのおじさんもはげましてくれました。健ちゃんは、きゅっとくちびるをかみしめて、こっくりをしました。

海べにでると、すずしいしお風がまともに吹いてきます。いかりをおろした南海丸が、船長室の屋根に、赤いはだか電燈をゆらゆらさせながら、浮かんでいます。

機関室から焼玉機関を焼く音が、ごうごうと流れでていました。

「ええかー。だすぞーっ。」

としをとった船頭さんが、しぶい声でどなりました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「おー。」

いせいのよいおじさんたちの声がやみのなかでいっせいにこたえました。

ダダダッ　タン　タン　タン……

エンジンがかかりました。

よいしょ、よいしょ……

かけ声といっしょに、いかりが上がりました。つないであったロープがはずされました。スクリューにまきかえされた白くあわだったうずが、岸の石がきへおしよせてくると、南海丸は、すべるように岸からはなれていきます。

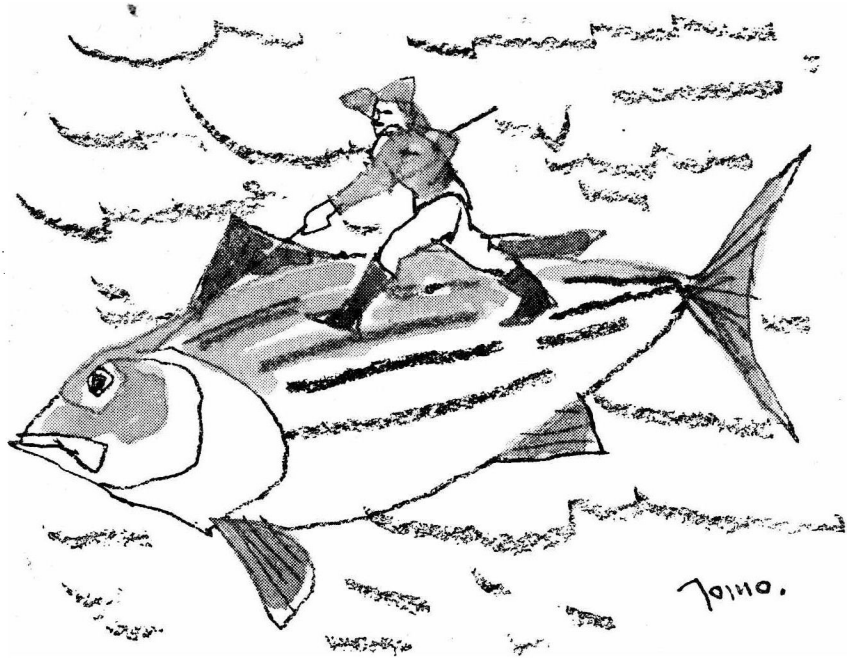
「にいちゃーん。がんばってよー。」

ミヨちゃんの声が、船の音にかきけされました。ミヨちゃんとかあちゃんは、黒い南海丸のかげに、いつまでも手をふっていました。

二　ミヨちゃんの夢

ミヨちゃんは、そのばん夢を見ました。

南海丸のへさきにつっ立ったにいちゃんが、かつおのつりざおをさし出して、海を



にらんでいます。

海のなかで、がばっと白い水しぶきが上がりました。つりざおが、きゅうっと下がりました。にいちゃんは、ぐっと足に力を入れてふみしめました。つりざおがゆみなりにしなりました。クジラのような大きいかつおが、つり糸のさきで青空にはねました。はね上がったおばけかつおが、どさりと船にかぶさりました。にいちゃんは、かつおの下じきになったかと思うと、そのおばけかつおの上に、ひらりと飛びのってつりざおをやりのように立てました。

「にいちゃーん。」
とさけぼうとしたとき目がさめました。
ミヨちゃんはたのしくなって、にいちゃんが帰ってくる夕方を待ちかねていました。
「かあちゃん。にいちゃんをむかえにいってくるよー。」
夕ごはんのしたくをしているかあちゃんに声をかけると、返事もきかぬうちに、村の魚市場へかけだしていきした。
どのかつお船も、夜、港をでて、よく日の夕方港へ帰ってくるのですが、近くの町からでているかつお船も、つれたかつおを水あげするために、魚市場のある城辺町のミヨちゃんたちの港にはいってきます。
夕焼けの空の港へ、かつお船が、二せき三せきとはいってきました。でも、みんなちがう船でした。ミヨちゃんが待ちくたびれたころ、「南海丸」とそめぬいた大漁旗を五つもあげて、南海丸が港へはいってきました。
「ふーん。南海は大漁じゃな。」
「南海が、大漁旗を五つもあげて帰ったのは久しぶりじゃなあ。」
ミヨちゃんのそばで、市場のおじさんたちがはなしています。港にはいってくる漁

船のはたの数で、その漁船の魚のとれ高がわかるのです。
ミヨちゃんは、にいちゃんがかつおをつったから大漁になったんだと思うと、また、うれしくなりました。
「にいちゃーん。」
ミヨちゃんが、つい大声でよびました。
「おや、ミヨちゃんか。そうだったなあ。南海には、ゆうべからにいちゃんがのったんだったなあ。でも、まだ船までは聞こえんぞ。」
ミヨちゃんの声にびっくりしてふりむいたおじさんが、わらいながらいいました。
「ねえおじさん。にいちゃんが、ようけかつおをつったから、大漁になったんよ。ね。」
ミヨちゃんは、胸をはっていいました。
「えっ。ああ、そうか。うーん。」
おじさんも、きっと、にいちゃんをほめてくれると思ったのに、うなっただけなので、ミヨちゃんはがっかりしました。
「ねえ、おじさん。」

ミヨちゃんが、じれったそうにさいそくしました。

「だがねえ、にいちゃんじゃあ、まだ、あのつりざおは使えんなあ。」

おじさんが、いいにくそうにいいました。それもそのはずです。かつおのつりざおは、せんたくものをほす、ものほしざおよりも、もっと大きく、もっと長いのです。そのはしの方を持って持ち上げようとしても、中学生には重くて持てません。

「でもおじさん。にいちゃんは、かつお船にのっていったのよ。」

ミヨちゃんが、おこったようにいいました。市場のおじさんは、すっかりあわてて しまいました。

「いやあ。こまったなあ。あのねえ。にいちゃんには、まだかつおはつれんが、エサまきをやったんだよ。エサまきがじょうずにできたら、かつおもようけつれる。だから、にいちゃんもつったようなものだよ。」

おじさんは、ミヨちゃんをなぐさめるようにいいました。

「なあんだ。にいちゃんはエサをまくだけ。」

ミヨちゃんには、にいちゃんがとっても小さく思えました。

「エサまきもむずかしいんだよ。エサまきが一人前になったらたいしたもんだ。南海

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com